Japanese Association of Educational Psychology

教育心理学研究, 2002, 50, 129—140

夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連

——家族機能および両親の養育態度を媒介として——

菅原ますみ[1]　八木下暁子[1]　詫摩紀子[2]
小泉智恵[3]　瀬地山葉矢[4]　菅原健介[5]　北村俊則[6]

本研究は，夫婦間の愛情関係が家族機能と親の養育態度を媒介として児童期の子どもの抑うつ傾向と関連するかどうかを検討することを目的として実施された。313世帯の父親，母親および子ども(平均10.25歳)を対象に郵送による質問紙調査を実施し，両親回答による夫婦関係と養育態度，および家庭の雰囲気と家族の凝集性，子どもの自己記入による抑うつ傾向を測定した。配偶者間の愛情関係と子どもの抑うつ傾向との間に相関は見られなかったが，家庭の雰囲気や家族の凝集性といった家族機能変数を媒介として投入した結果，両親間の愛情の強固さと家族機能の良好さが，また家族機能の良好さと子どもの抑うつ傾向とが関連することが明らかになった。また同時に，配偶者間の愛情関係は親自身の養育態度とも関連し，相手への愛情の強さと子どもに対する態度の暖かさや過干渉的態度との間に有意な関係が見られた。しかし，こうした養育態度のうち，子どもの抑うつの低さと関連が認められたのは，母親の養育の暖かさのみであり，父親の養育態度は子どもの抑うつ傾向とは関連しなかった。

キーワード：夫婦関係，家族機能，養育態度，児童期の抑うつ

問　題

児童期は，学校生活や友達集団の中で子どもの世界が飛躍的に広がり，社会的な発達が著しい時期である。この時期の子どもたちの家庭外での成長・発達を支えるのは，子どもが依って立つ家族関係であり，家族関係が健全に機能しているかどうかが精神的安定や学校適応などに大きく影響するものと考えられる。本研究では，家族関係の基盤を成す夫婦関係に焦点を当てて，それが児童期の子どもの精神的健康とどのようなメカニズムで関連を持つか検討することを目的としておこなわれた。

夫婦関係と子どもの精神的健康や不適応行動の出現との関連については，最近の欧米を中心とした発達研究においても注目され始めてきている。(Fincham, 1994; Davies & Cummings, 1998など)。とくに1990年代に入って，子どもの発達や適応の問題を“家族システム”の枠組みの中で理解していこうという機運が強まり(Sameroff, 1994 ; Wagner & Reiss, 1995 ; 数井・無藤・園田, 1996)，従来中心的に検討されてきた親子関係だけでなく，家族関係のもう一つの重要な構成要素である夫婦関係を含めた実証的研究の必要性が指摘されてきている(Fincham, 1998)。夫婦関係がどのようなものであるかは，家庭環境の一部として直接的に子どもの精神的な安定に影響するだけでなく，親自身の養育に関する意識や行動を促進したり阻害したりして，間接的にも子どもの精神的不健康や問題行動の出現に関わってくることが予想される。

ではいったい，夫婦関係のどの側面が，どのようにして子どもの精神的健康に関わってくるのであろうか。先行研究では，おもに夫婦の意見の不一致(marital discord)や葛藤関係(marital conflict)との関連が扱われてきており，こうした夫婦間のネガティブな側面は，子どもの攻撃的・反社会的な問題行動(externalizing problems)や不安や引きこもりなどの抑うつ・神経症的問題行動(internalizing problems)などの出現に影響することが報告されてきている(e.g., Emery & O'Leary, 1982 ; Grynch & Fincham, 1990)。

確かに，両親の間の喧嘩や意見の不一致に接することは，子どもを不安にし，情緒的な安定性を脅かすことになろう(Davies & Cummings, 1998)。しかし，意見の食い違いから揉めることが多くてもお互いに愛し合っ

1　お茶の水女子大学　〒112-8620　文京区大塚2－1－1
E-mail : sugawara@li.ocha.ac.jp
2　東京国際大学
3　労働科学研究所
4　名古屋大学
5　聖心女子大学
6　熊本大学

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ていて，最終的に破綻することなく結婚生活を送っている夫婦も少なからず現実には存在する。こうした夫婦関係の子どもに対する影響は，愛情も冷めぶつかりあうだけの夫婦や，表面上の争いはなくても家庭内別居状態のいわゆる“仮面夫婦”のそれとは異なったものになってくる可能性があるのではないだろうか。Braiker と Kelley (1979) は，結婚後3年以上の夫婦間の関係性変化に関する自由記述をもとにして作成した夫婦関係質問紙 (relationship questionnaire, Braiker & Kelly, 1979)の因子分析を実施し，愛情関係(general love)と葛藤関係 (conflict-negativity) の2つは直交する独立な因子であることを見出している。

現代の結婚の多くは，恋愛を中心とした両性間の愛情関係を基礎に成立しており (Hendrick & Hendrick, 1992)，日本においても1997年には恋愛結婚が全体の9割近くを占めるに至っている (国立社会保障・人口問題研究所, 1998)。子どもの発達に関わる夫婦関係のもう一方の側面として，夫婦間の愛情関係 (marital love) を考慮することもまた重要であろう。この点に関しては，Fincham(1998) も夫婦関係と子どもの発達との関連をテーマとする研究総覧の中で，夫婦間の葛藤関係を中心とした従来の研究の枠組みに加えて，幸福で調和的な夫婦関係 (marital happiness or marital harmony) といった“夫婦関係の健康さ” (marital health) についても目を向けていく必要があることを指摘している。こうした観点から，本研究では夫婦関係の指標としてこれまでほとんど検討されることがなかった愛情関係に注目して，それがどのようなメカニズムで子どもの精神的健康と関連を持つか見ていきたい。

さて，本研究では，子どもの精神的健康度の指標として抑うつ傾向を取り上げる。児童期の抑うつについては，児童精神医学の領域をはじめとして近年研究が活性化してきている (村田・小林, 1987 ; Kovacs, 1997 ; 辻井・本城, 1998)。子どもの抑うつをどう捉えるかについては様々な議論があるが (西出・夏野, 1997 ; 六角, 1999)，基本的な症候論および病因論的には成人の抑うつとほぼ同一のものであるとする立場が優勢になってきている (Dulcan & Martini, 1999)。アメリカ精神医学会による精神疾患診断基準の第4版においても (DSM-IV, American Psychiatric Association, 1994)，いくつか児童期・青年期に特有な症状に関する注記はあるものの (例えば大うつ病エピソードで，小児の場合には抑うつ感情として“いらいら(irritability)”が前面に出ることがあることなど)，うつ病を含む気分障害は子どもも成人と共通の診断基準を用いるよう設定されている。

臨床的なレベルでの児童期のうつ病は，方法やサンプルによって変動はあるが，欧米ではおよそ2～5％程度の子どもたちに出現することが一般人口を対象とした大規模な研究から明らかにされてきている (Kashani, Orvaschel, Rosenberg & Reid, 1989 ; Fleming, David & Offord, 1990)。日本の一般人口中の児童 (7～8歳) を対象として精神科診断面接を実施した先行研究でも，2.7％の DSM-III-R (American Psychiatric Association, 1987) 相当の大うつ病の出現率が観測された (Sugawara, Mukai, Kitamura, Toda, Shima, Tomoda, Koizumi, Watanabe & Ando, 1999)。村田と小林 (1987) による小学校2～6年を対象とした調査研究でも，DSM-III (American Psychiatric Association, 1987) の大うつ病に相当する児童は2.6％存在すると試算されている。低学年においてさえ，2～3学級に数名は心配な子どもたちが存在する割合である。増加の一途をたどる不登校や自殺との関連を考慮すると，決して見過ごすことのできない状況であることが推測されよう。

また，こうした児童期の抑うつは，対人関係からの引きこもりや学業成績の低下，絶望感による希死願望，食欲不振や不眠などの症状によってその時点での子どもの生活適応や発達を阻害するだけでなく，その後の青年期や成人期での精神的健康にも大きく影響することが指摘されてきている (辻井・本城, 1998)。児童期に抑うつ状態にあったり，うつ病に罹患した子どもたちを長期間追跡した研究の結果は，一様にその後の青年期や成人期での自殺や自殺企図率，およびうつ病罹患率の高さを示している (Pfeffer, Klerman, Hurt, Lesser, Peskin & Siefker, 1991 ; Harrington, Bredenkamp, Groothues, Rutter, Fudge, & Pickles, 1994 ; など)。より早期での有効な対処や介入が重要であると考えられるが，そのためにも，児童期の抑うつに影響する諸要因の特定や発現メカニズムを探っていく必要があろう。

さて，子どもの抑うつ状態の発現関連要因としては，これまでの成人の抑うつ研究からその関連可能性が想定される遺伝子的要因や神経伝達物質に関連する生化学的要因と並んで，家族関係を中心とした心理社会的要因についても探求されてきている (Cicchetti & Toth, 1998)。子どもの抑うつに関する14の代表的な疫学研究を総覧した Fleming ら (1990) によると，家族機能を扱った4つの研究 (Kandel & Davies, 1982 ; Garrison, Schoenbach & Kaplan, 1985 ; Bird, Canino, Rubio-Stipec, Gould, Ribera, Sesman, Woodbury, Huertas, Pagan, Sanchez-Lacay & Moscoso, 1988 ; Kashani, Orvaschel, Rosenburg & Reid, 1989) でいずれも家族関係の機能不全と抑うつと

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

の間に有意な関連を見出している。思春期の抑うつを縦断的に検討したSheeber, Hops, Alpert, Davis & Andrews (1997) の研究でも，サポーティブな家族関係は子どもの抑うつを抑制し，反対に葛藤的な関係は抑うつを悪化させるものであることを確かめている。中学生とその親を対象として，子どもの抑うつ傾向と家族システムの機能状態との関連を分析した西出と夏野(1997)の研究でも，子どもや母親が認知する機能の良さが子どもの抑うつ感と関連することを報告している。

夫婦関係と子どもの抑うつとの関連では，これまでは夫婦間の葛藤を中心に検討されてきているが，Cumsille と Epstein (1994) や Mahoney, Jouriles & Scarone(1997)，Fincham (1998) が指摘しているように，夫婦間の葛藤と子どもの抑うつとの相関は総じて弱いものであることが知られている。抑うつの子どもたちに関する臨床的な研究や経験からは，家族全体の機能不全とともに夫婦関係の問題が大きな危険因子であることが報告されていることから(Stark, Humphrey, Crook & Lewis, 1990)，夫婦関係が子どもの抑うつに影響する際には媒介的な役割を果たす変数が存在することが予想される。また，本研究ではこうした媒介変数として，上記の家族機能とともに，子どもの抑うつの危険因子として重視されてきている両親の養育態度 (Ge, Lorenz, Conger, Elder & Simons, 1994 ; Petersen, Sarigiani & Kennedy, 1991)を取り上げて検討していく。暖かさを欠いた親の養育態度や過干渉傾向がうつ病の発現の危険因子となることが多くの精神医学的研究から明らかにされてきており (Rogers, 1996 ; 坂戸・染矢, 1999 など)，本研究ではこうした親の態度を測定することが可能な Parental Bonding Instrument (Parker, 1979) を児童期の子どもを持つ親に適用可能なものに改変した尺度を開発し，児童期における抑うつ傾向に対して夫婦関係とともにどのような関連を持つか分析していくことにした。

さて，夫婦関係が養育態度を中心とした親子関係に及ぼす影響についてはすでに欧米には多くの先行研究がある。関連する68の研究についてメタ・アナリシスをおこなった Erel と Burman (1995) は，両者は正の相関関係にあり，夫婦関係の質は養育行動や態度を通じて子どもに同じ方向で影響する (夫婦関係がネガティブなものなら，養育行動・態度やそのほかの親子関係の指標もネガティブなものとなる) とする流出仮説 (spill-over hypothesis) を支持する結論を得ている。本邦では，こうした夫婦関係と親子関係との関連についての検討は母親に関する検討はおこなわれ始めたものの (数井・無藤・園田, 1996)，両親を対象とした研究は未だほとんどない。数井ら (1996) の研究では，平均年齢3.4歳の子どもを持つ48組の母子間の愛着形成に対する夫婦関係の役割について検討されているが，子育てに対する母親のストレス感が愛着形成に影響するものの，もしも夫婦関係が良好なものであれば高いストレスを抱えた母親であっても子どもとの愛着関係は損なわれずに済むことが明らかにされている。乳幼児期における母子関係形成に対する夫婦関係の果たす役割の重要性を示す結果と考えられ，これ以降の発達段階での検討が急がれる。また，ここで対象とされなかった父親自身の意識や父子関係についても検討される必要があろう。そこで本研究では，児童期の子どもを持つ家族を対象とし，母親と父親双方の相手に対する愛情のあり方が両親の養育態度とどのような関連を持つか考察することも目的のひとつとしていきたい。

以上より，本研究では，夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連メカニズムについて，“夫婦間の配偶者に対する愛情度が家族機能および親自身の子どもに対する養育態度形成に影響し，これらを媒介として子どもの抑うつ重症度と関連する”という仮説について検討することを目的とした。

方　　法

対象

1984年8月～1986年2月までの間に神奈川県某市市立病院産婦人科を受診した1,360名の母親が妊娠・出産・子育てに関する縦断研究 (Kitamura, Sugawara, Sugawara, Toda & Shima, 1996 ; 菅原, 北村, 戸田, 島, 佐藤 & 向井, 1999)に登録された。このうち，対象となった病院で出産し，産後の調査対象となったのは1,113名である。妊娠中3回，出産後8回の調査を継続してきているが，このうち，本研究の対象となったのは出産後11年目における追跡調査のデータである (調査実施期間は，1996年6月～8月)。

サラリーマン族が多くを占める地域で開始された調査だったので，転居その他で住所不明となった家族が多く，出産後11年目の時点で回収可能であったのは，後述のように313家族であった。妊娠初期に登録された母親1,360名のうち，サンプルとして残ったこの313名とドロップアウトした1,047名とで人口統計学的変数に差があるかどうか検討をおこなったところ，登録時の家庭の年収，母親および父親の教育歴には有意差はみられなかった。ただし，登録時の母親の年齢はサンプルとして残っているグループの方がやや高めであった (サンプル群：28.44歳, SD：4.44；ドロップアウト群：27.73

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

歳, SD : 4.35, : p<.01)。

母親・父親・対象児を対象とした11年目の追跡調査(郵送によって配布・回収)に応じたのは母親386名・父親325名・子ども400名であり,このうち父母子3者のデータが揃った313世帯を分析の対象とした。対象となったのは母親の平均年齢は39.85歳(29〜53歳),父親は43.04歳(31〜60歳),子どもは10.25歳(9〜11歳)で,子どもの性別構成は,男児49.2%・女児50.8%であった。

調査手続きと内容

出産後11年目の郵送調査では,母親用,父親用および子ども用の質問紙を作成し,お互いのプライバシーを護るために3者別々の封筒で回収をおこなった。また,各質問票の教示文中にも個別に回答してお互いに相談しあわないよう依頼した。両親に対してはテレフォンカードと家庭教育用のリーフレットを謝礼として同封し,子どもについては,回答者に後日小さな文房具を謝礼として送付した。今回の分析に使用した測定尺度は以下の通りである。

出産後11年目時点での夫婦関係 男女間の愛情関係に関する心理学的研究は,社会心理学の分野で恋愛(romantic love)の概念によって1970年代以降活発に研究されるようになってきているが(Rubin, 1970 ; Lee, 1977など),夫婦間の愛情を対象とした研究は未だ少ない。既存の夫婦関係尺度の項目にもこうした恋愛感情を含む愛情感情に相当するものはほとんど見当たらないので,筆者らは社会心理学における恋愛尺度を参考にして夫婦間の愛情尺度(Marital Love尺度)を開発した(菅原・詫摩, 1997)。なお,本尺度と従来の夫婦関係尺度との並存妥当性については先行研究の中で確認している(菅原・詫摩, 1997)。

予備調査(23歳〜70歳のカップル98組 ; 菅原・詫摩, 1997)を経て作成された15項目のMarital Love尺度を本研究の対象家庭の夫・妻それぞれに実施した。夫版(n=325)・妻版(n=386)の構造分析(菅原, 眞榮城, 小泉, 酒井, 2001)から得られた10項目(TABLE 1)の評定値の合成得点を妻版・夫版それぞれについて算出し,今回の分析の対象とした。この10項目については,主成分分析の結果から妻版・夫版ともに1次元構造が確認され,信頼性係数αは夫版=.93,妻版=.94であった(TABLE 1)。評定は1.全くあてはまらない〜7.非常によくあてはまるまでの7段階である。

子どもに対する養育態度 Parental Bonding Instrument(Parker, 1979)を現在の自分の対象児に対する態度を測定するものに改変して(25項目, 1.全く該当しない〜4.該当するの4段階評定),母親版と父親版を作成した。

TABLE 1 Marital Love尺度の主成分分析(数字は因子負荷量)

項目	夫版 (n=313)	妻版 (n=313)
・妻(夫)とは今でも恋人同士のような気がする	.79	.82
・妻(夫)のためなら何でもしてあげるつもりだ	.85	.84
・妻(夫)と一緒にいると,夫(妻)を本当に愛していることを実感する	.87	.90
・妻(夫)とはお互いに出会うためにこの世に生まれてきたような気がする	.78	.80
・妻(夫)のことならどんなことでも許せる	.66	.65
・妻(夫)は魅力的な女性(男性)だと思う	.85	.85
・妻(夫)は言葉に出さなくても私の気持ちを理解してくれる	.77	.73
・妻(夫)が幸せになるのが私の最大の関心だ	.79	.84
・どんなことがあっても妻(夫)の味方でいたい	.78	.80
・妻(夫)を一人の人間として深く尊敬している	.80	.85
説明率	63.4%	65.7%
10項目のα係数	.93	.94

本尺度は,あらかじめ2つの下位尺度:養育態度の暖かさに関する下位尺度と,過干渉傾向に関する下位尺度が設定されている。父親版(n=313)・母親版(n=313)それぞれについて想定された2因子による因子分析(主因子法バリマックス回転)をおこなった結果から,各因子に.35以上の負荷量を持つ項目(養育の暖かさ尺度については10項目,過干渉傾向尺度は6項目)をそれぞれの下位尺度項目として用いることにした(TABLE 2)。α係数は,養育の暖かさ尺度については父親版=.83・母親版=.80,過干渉傾向は父親版=.68・母親版=.69である。それぞれの評定値を加算した下位尺度得点を以降の分析に用いた。

家族機能に関する尺度 家族機能に関しては個々の構成メンバー(父親・母親・子ども)にとっての居心地の良さに関する評価と,家族全体の機能性に関する評価の2つの観点から検討することにした:①家庭の雰囲気尺度:個人が家庭にいる時の居心地の良さについて測定するために,家庭の雰囲気を表す9つの形容詞(TABLE 3)で回答を求める尺度を作成した。父親版・母親版・子ども版をそれぞれ同一の項目で構成し,3者別々に回答を求めた。評定は,1.はい・2.少しはい・3.少しいいえ・4.いいえの4段階である。父親版・母親版・子ども版それぞれについて主成分分析を実施し,1次元構造を確認した(TABLE 3)。家庭ごとの雰囲気得点を算出するために,3者を併せた27項目の合算尺度のα係数を求めたところ.82と満足いく値が得られたので,父親版・母親版・子ども版を合計した得点を分析に用いることにした。② FACES-III:家族の機能状態を凝集性と柔軟性の2次元で測定するFamily Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 2 親の養育態度尺度の因子分析（主因子法バリマックス回転，数字は因子負荷量）

項目	父親版 (n=313)	母親版 (n=313)
第1因子：養育の暖かさ		
・よくこの子にほほえみかけている	.72	.66
・この子に優しい	.65	.67
・この子と色々なことを話すのを楽しんでいる	.69	.52
・この子が抱えている問題や悩みに理解を示している	.59	.49
・ほめてあげない（—）	-.54	-.58
・暖かく優しい声で話しかけている	.58	.64
・この子に対して冷たい（—）	-.64	-.52
・この子が精神的に不安定なときはなだめている	.46	.40
・あまりこの子としゃべらない（—）	-.50	-.36
・この子が必要なことや望んでいることに理解を示していない（—）	-.45	-.45
説明率	28.1%	25.1%
10項目の α 係数	.83	.80
第2因子：過干渉傾向		
・この子がしようとすることすべてにわたってコントロールしようとしてしまう	.60	.51
・この子のプライバシーを侵害している	.55	.48
・この子に対して過保護だ	.48	.62
・この子は自分(親)がそばにいないと自分のことができない子だと思う	.51	.52
・この子を子ども扱いする(年齢より幼く扱う)ことが多い	.51	.52
・この子を自分(親)に頼らせようとしている	.44	.47
説明率	14.0%	13.5%
6項目の α 係数	.68	.69

（—）：逆転項目

TABLE 3 家庭の雰囲気尺度（“居心地の良さ”）の主成分分析（第1主成分への負荷量）

項目	父親版 (n=313)	母親版 (n=313)	子ども版 (n=313)
・あたたかい感じがする	.88	.87	.79
・楽しい	.84	.85	.74
・のびのびできる	.81	.79	.57
・ほっとする	.79	.79	.67
・つめたい感じがする（—）	-.78	-.69	-.38
・さわやかな感じがする	.75	.71	.72
・たいくつな感じがする(—)	-.59	-.53	-.54
・からっぽな感じがする(—)	-.57	-.67	-.45
・にぎやかだ	.56	.55	.63
説明率	54.7%	52.8%	38.9%
父親・母親・子ども3者の27項目合算版の信頼性係数	α=.87		

（—）：逆転項目

(FACES-III, Olson, Porter & Levee, 1985；日本語版：貞木，榧野，岡野，1992）を父親・母親それぞれに評定してもらった。2つの下位尺度（凝集性10項目と柔軟性10項目）についてそれぞれ主成分分析によってその構造を検討したが，凝集性についてはTABLE 4に示す通り強固な1次元性が確認された。しかし，多くの先行研究（Olson, Porter & Levee, 1985；黒川，1990；貞木，榧野，岡野，1992など）と同様に本研究でも柔軟性については1次元性を再現することはできなかった。そこで以降の分析では，10項目の凝集性項目を加算した得点のみを分析に用いることにした。

TABLE 4 家族の凝集性尺度の主成分分析

項目	父親版 (n=313)	母親版 (n=313)
・私達は家族で何かをするのが好きである	.68	.78
・家族で何かをするとき，全員が集まる	.72	.79
・家族の誰もがお互いに強い結びつきを感じている	.80	.85
・相談のあるものは,家族の誰かに話を聞いてもらう	.72	.69
・家族のまとまりがとても大切である	.85	.78
・家族は一緒に自由な時間を過ごすのが好きである	.74	.77
・家族はお互いに助け合う	.73	.77
・私達はお互いの友達を受け入れる	.70	.53
・家族は他人よりもお互いに親しみを感じている	.73	.66
・私達は家族で一緒にすることをすぐに思いつける	.72	.73
説明率	54.8%	54.7%
父親版・母親版の20項目合算尺度の信頼性係数	α=.92	

子どもの抑うつ傾向 Child Depression Self-rating Scale（CDSS, Birleson, 1981）の日本語版（村田，1996）を実施した。計18項目で，選択肢は“いつもそうだ（2点）・ときどきそうだ（1点）・そんなことはない（0点）”の3段階である。抑うつ症状が高頻度に見られる場合に高い評定値を与え，総合得点が高いほど抑うつ重症度が高いと判断する。CDSSは1次元構造が仮定された尺度であるが，回答結果をもとに主成分分析を実施したところ，第1主成分への負荷が0.3以下の項目が3項目見られた（各項目の負荷量：「遊びに出かけるのが好きだ」=.29,「いじめられてもいやと言える」=.25,「こわい夢を見る」=.28)。いずれも抑うつ感の中核を成す内容ではないと判断されたので，これら3項目を除いた15項目の合成得点を子どもの抑うつ傾向の指標とした（TABLE 5)。15項目の α 係数は，.78である。

結　　果

1．子どもの抑うつ傾向と各説明変数との関連

子どもの抑うつ傾向と各説明変数との関連について相関を求めて検討したところ，母親の養育態度の暖かさ（r=-.16, p<.01）および父親の過干渉傾向（r=.14, p<.05）と弱い関連が認められた。家族機能については，家庭の雰囲気とは中程度の相関（r=-.45, p<.01）が，またFACES-IIIの凝集性との間にも弱い負の相関（r=-.17, p<.01)がみられ，家族機能の不良さと抑うつ傾向との関連性が示された。しかし，Marital Love尺度の得点とは有意な相関は認められなかった。

本研究で使用している子どもの抑うつ尺度(CDSS)はうつ病のスクリーニング尺度として開発されたものである。臨床的な介入が必要とされる重症度に近い抑うつ群の特徴を知るために，CDSSによるうつ病診断の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 5 子ども版自己記入式抑うつ尺度項目の主成分分析（第1主成分への負荷量，n=313）

項目	負荷量
・楽しみにしていることがたくさんある（—）	.48
・とてもよくねむれる（—）	.41
・なきたいような気がする	.45
・にげだしたいような気がする	.56
・おなかがいたくなることがある	.37
・元気いっぱいだ（—）	.49
・食事が楽しい（—）	.41
・生きていてもしかたがないと思う	.56
・やろうと思ったことがうまくできる（—）	.40
・いつものように何をしても楽しい（—）	.60
・家族と話すのがすきだ（—）	.48
・ひとりぼっちの気がする	.59
・おちこんでいてもすぐに元気になれる（—）	.51
・とても悲しい気がする	.52
・とてもたいくつな気がする	.59
説明率	25.0%
15項目の α 係数	.78

（—）：逆転項目

判別点（カットオフポイント）は18項目版で17点以上とすることが適切であるとする先行研究（Birleson, 1981；村田, 1996）の報告を参照し，今回使用したCDSS15項目で14点以上の子どもたちを抑うつ高群（27名, 男児14名, 女児13名, 高位8.3%）とした。これに対し，うつ病である可能性がほとんど疑われない下位25パーセンタイル内の70名（CDSS合計点3点以下, 男児33名, 女児37名）を抑うつ低群として2群間の比較をおこなった。

TABLE 6に各説明変数について抑うつ高群と低群それぞれの平均値の差の t-検定をおこなった結果を示した。夫婦の愛情尺度の得点では，母親の父親に対する愛情得点で両群に有意な差が見られ，抑うつ高群の母親の方が父親に対する愛情がより低い傾向にあることが示された（p<.01）。一方，父親の母親に対する愛情得点には差が見られなかった。両親の養育態度についても，両群で有意な差が見られたのは母親の養育の暖かさであり，抑うつ高群の母親の方がより低得点となっている（p<.01）。一方，父親については過干渉傾向で5%水準で抑うつ高群の父親の方がより過干渉傾向が強い傾向が示された。

TABLE 6 子どもの抑うつ傾向と各説明変教との関連（抑うつ高群と抑うつ低群の平均値の差に関する t-検定）

	抑うつ高群(n=27) 平均（SD）	抑うつ低群(n=70) 平均（SD）	t-値
<夫婦の愛情関係>			
母親の父親への愛情	41.43(12.60)	49.03(10.05)	-2.93**
父親の母親への愛情	51.32(11.94)	51.82(9.71)	- .20*ns*
<家族機能>			
家庭の雰囲気	83.14(10.78)	99.53(6.31)	-8.05**
家族の凝集性	71.89(13.37)	82.00(10.38)	-3.40**
<両親の養育態度>			
父親の養育の暖かさ	31.45(3.73)	31.44(4.33)	.15*ns*
父親の過干渉傾向	12.41(3.08)	10.78(2.71)	2.29*
母親の養育の暖かさ	32.29(3.78)	34.58(3.57)	-2.64**
母親の過干渉傾向	10.71(2.95)	10.73(2.78)	- .03*ns*

**：p<.01；*：p<.05

家族機能に関しては，両群で比較的大きな差が観測された。家庭の雰囲気，家族の凝集性ともに抑うつ高群はかなり低い得点を示しており（両者とも p<.01），抑うつ高群の家庭の家族機能は相対的に低いレベルの状態にあることが示されているとみることができよう。

2．仮説モデルに対するパス解析

家族機能に関する2つの尺度（家庭の雰囲気尺度・FACES-IIIの凝集性尺度）の間には比較的高めの相関（r=.61, p<.01）が見られたが，メンバーにとっての家庭の居心地の良さと家族の関係性それぞれに対する夫婦関係の影響を検討するために，仮説モデルに従って，FIGURE 1・FIGURE 2のような2つのパス解析をおこなった。親子3者による家庭の雰囲気評価との関連（FIGURE 1）では，仮説通り配偶者に対する愛情得点が高いほど家庭の雰囲気は暖かく，また構成メンバーにとっての居心地の良さを保証する方向に有意な関連が示された（β の値は夫=.37, 妻=.23, ともに p<.01, 決定係数の値は R^2=.25, p<.01）。相対的な貢献度から見ると，父親の母親に対する愛情の方が家庭の雰囲気に対してはやや強い関連を示している。また，両者の愛情得点は，それぞれ自分自身の子どもに対する養育態度とも有意な関連を有していた。親の養育態度の“暖かさ”と“過干渉傾向”という2つの養育態度因子のうち，両親とも“暖かさ”のみに有意な相関がみられたが，その関連の程

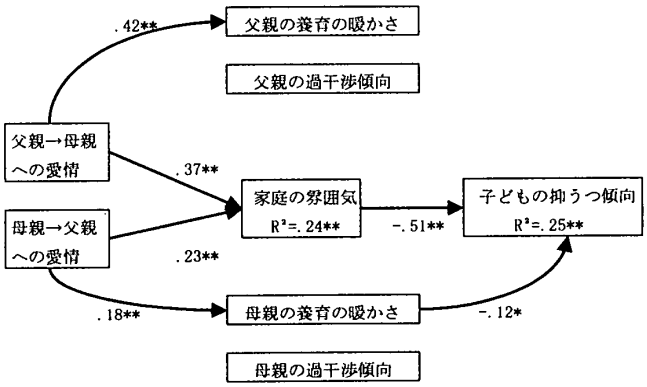

FIGURE 1 夫婦の愛情関係，家庭の雰囲気，両親の養育態度と子どもの抑うつ傾向に関するパス解析の結果

（→は有意なパス，*p<.05，**p<.01，n=313）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

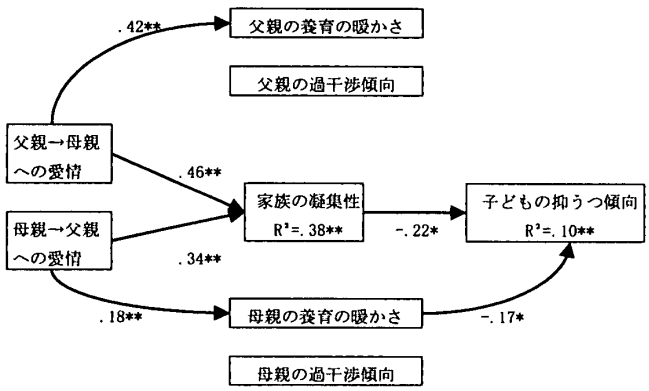

FIGURE 2　夫婦の愛情関係，家族の凝集性，両親の養育態度と子どもの抑うつ傾向に関するパス解析の結果

（→は有意なパス，*p<.05，**p<.01，n＝313）

度は父親の方がより強く，母親に対する愛情得点が高いほど子どもに対する養育態度が暖かいものになる傾向が見られた（r＝.42, p<.01）。これに比較すると，母親の父親に対する愛情得点と母親自身の養育態度の暖かさとの関連は，有意な水準には達していたものの弱い値に留まっている（r＝.18, p<.019）。

最終的な従属変数である子どもの抑うつ傾向との関連では，両親間の愛情得点からの直接的なパスは認められなかったが，家庭の雰囲気と抑うつ傾向とは β＝-.51（p<.01）という比較的強めの関連が見られ，家庭の雰囲気が暖かく居心地が良いものであれば子どもの抑うつ傾向はより低いレベルにあることが示された。親の養育態度とは，母親の養育の暖かさとのみ関連しており，母親の養育態度が暖かいものであるほど子どもの抑うつは抑制される傾向にあることが示された（β＝-.12, p<.05）。

FIGURE 2 では，母親および父親が評価した家族の凝集性について分析をおこなった結果を示した。子どもの抑うつ傾向に対する説明率は低下するものの（R^2＝.10, p<.01），FIGURE 1 で検討した家庭の雰囲気尺度と同様の関連図式が示された。

3．夫婦の愛情関係パターンによる検討

夫婦の愛情関係が諸変数に及ぼす影響をさらに深く知るために，夫と妻の愛情得点の高低（夫・妻それぞれの平均値を境に高得点群と低得点群を作成した：夫の平均値は 50.1 点，妻の平均値は 45.41 点。）の組を合わせによって次のような 4 つのグループを作成した：1)愛情希薄型（夫婦ともに低得点群，93 組），2)妻片思い型（夫は低得点群で妻は高得点群，54 組），3)夫片思い型（妻は低得点群で夫は高得点群，52 組），4)相思相愛型（夫婦ともに高得点群，99 組）。

家族機能との関連（TABLE 7）では，家庭の雰囲気と家族の凝集性ともに同様な傾向が確認された。相思相愛型で両者ともにポジティブな方向に最も得点が高く，愛情希薄型は最低であった。粗点を比較しても10ポイント程度の大きな差が見られ，愛情希薄型では相対的に家族機能が低いものである様相が示された。夫および妻片思い型はともに中間的な値を示しており，妻片思い型と夫片思い型の間には有意な差はなかった。養育態度については（TABLE 7），パス解析の結果と同様に“暖かさ”にのみ差が見られ，愛情希薄型では夫婦ともに最低の値を示していた。相思相愛型とは有意差はみられなかったものの，父親の養育態度の暖かさは夫片思い型で，母親のそれは妻片思い型でともに最高値が観測されている。

TABLE 7　夫婦の愛情関係パターンと家庭の雰囲気（“居心地の良さ”）・家族の凝集性，および親自身の養育態度との関連（一元配置分散分析後の Duncan の多重比較）

	家庭の“居心地の良さ”	家族の凝集性
愛情希薄群(93組)	88.24a	69.22a
妻片思い群(54組)	93.82b,c	77.19b,c
夫片思い群(52組)	94.00b,c	79.23b,c
相思相愛群(99組)	98.20b,d	84.32b,d

	養育の暖かさ(父)	養育の暖かさ(母)	過干渉(父)	過干渉(母)
愛情希薄群(93組)	29.88a	32.04a	32.04	11.66
妻片思い群(54組)	31.14c	34.79b,c	34.79	11.00
夫片思い群(52組)	32.85b	32.37d	32.37	10.70
相思相愛群(99組)	32.78b,d	33.66b	33.66	11.24

a，b 間および c，d 間で p<.05 で有意差あり

一方，子どもの抑うつ傾向との関連を見ると，抑うつ高群と低群での 4 群の出現頻度は，愛情希薄群は抑うつ高群に40.0%（8 組），抑うつ低群に19.6%（11 組），妻片思い群は抑うつ高群に10.0%（2 組），抑うつ低群に19.6%（11 組），夫片思い群は抑うつ高群に30.0%（6 組），抑うつ低群に14.3%（8 組），そして相思相愛群は抑うつ高群に20.0%（4 組），抑うつ低群に46.4%（26 組）という比率になった。抑うつ高群には愛情希薄群と夫片思い群が相対的に多く出現しているという結果とみることができよう。抑うつ高群と抑うつ低群の愛情希薄群と相思相愛群の出現頻度についてカイ 2 乗検定をおこなったところ，5%水準で有意な違いがあることが確認された（χ^2=5.21, p=.022）。

家庭の雰囲気得点のうち，子ども評価分だけを取り出した得点では相思相愛群と愛情希薄群の間で有意な差が確認された（TABLE 8）。愛情希薄群ではより家庭の雰囲気を“冷たく居心地の悪いもの”と子どもが感じ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 8 夫婦の愛情関係パターンと子ども変数との関連（一元配置分散分析後の Duncan の多重比較）

	子どもが認知している家庭の“居心地の良さ”	抑うつ傾向：総合点
愛情希薄群(93組)	29.10a	22.64
妻片思い群(54組)	30.23	21.81
夫片思い群(52組)	29.55	22.54
相思相愛群(99組)	31.06b	21.64

抑うつ項目：	「よく眠れる」	「逃げ出したい」	「食事楽しい」	「家族と話すのが好き」
愛情希薄群(93組)	1.24a	1.76a	1.41b,d	1.44a
妻片思い群(54組)	1.52b	1.63	1.71a	1.56
夫片思い群(52組)	1.27	1.53b	1.44b,d	1.54
相思相愛群(99組)	1.41	1.58b	1.68c	1.67b

a，b 間および c，d 間で $p<.05$ で有意差あり

ているのである。また，全対象者の抑うつ傾向得点に関しては，総得点では4群間で有意な差はみられなかったが，項目レベルで検討してみると以下の4項目で群間差が見られた：「とてもよく眠れる（逆転項目）」では愛情希薄群と妻片思い群との間に，また「逃げ出したいような気がする」では愛情希薄群と夫片思い群および相思相愛群との間に差が見られ，ともに愛情希薄群で「よく眠れない」または「逃げ出したい気がする」傾向がより強くなっている。家族関係に関連する「家族と話すのが好きだ」では，家庭の雰囲気評定と同様に愛情希薄群に比較して相思相愛群の肯定傾向が強く，片思いの2群は中間的な値を示している。「食事が楽しい」では妻片思い群が最高値を示し，次いで相思相愛群が続き，愛情希薄群と夫片思い群は低い肯定傾向を示していた。

考　　察

1．夫婦の愛情関係と子どもの抑うつとの関連

夫婦関係が子どもの精神的健康にどのような影響を及ぼすかということについては，これまで夫婦間の葛藤関係を中心に検討されてきたが，本研究では，夫婦関係のもう一つの重要な側面である愛情関係に焦点を当てて検討を試みた。その結果，対象者全体での相関は葛藤関係を扱った従来の研究と同様に低く（e.g., Cumsille & Epstein, 1994 ; Mahoney, Jouriles & Scavone, 1997 ; Fincham, 1998），有意な水準には達しなかったが，抑うつ傾向の比較的強いグループ（抑うつ高群）と低いグループ（低群）を比較したところ，抑うつ高群の“母親の父親に対する愛情”がかなり大きな得点差でより低いものであることが明らかになった。

母親自身の抑うつ傾向が，同様に母親の父親に対する愛情のみと関連する（父親から愛されている程度とは関連しない）ことを著者らの先行研究で報告してきたが（詫摩，八木，菅原，北村，1999），この結果とあわせて見ると，夫婦関係の悪化に伴う母親の抑うつが子どもの抑うつを促進し，しかもそれは連続的な影響の仕方というよりは，母親の父親に対する愛情度があるレベル以下の低いものになった場合に子どもに対する影響も顕著になってくるという可能性も考えられよう。母親自身の抑うつが子どもの抑うつの大きな原因の1つとなることはよく知られたことであり（Zahn-Waxler, 1995 ; 菅原，1997），夫婦関係を経由した母子の抑うつの同時性についても検討される必要があると考えられる。

また，両親の愛情関係の組み合わせによって検討してみたところ，抑うつ高群と低群の比較では相思相愛群は低群により多く，ともに冷えている愛情希薄群は高群に多く出現する傾向が有意に認められた。夫婦間の情緒的な絆のあり方が子どもの精神的健康に影響しうることを示す結果とみることができよう。また，片思い型の家庭では，片思いをしている方の子どもに対する養育態度の暖かさ（父親片思い型では父親の，母親片思い型なら母親の養育態度の暖かさ）が最高得点を示す傾向が認められ，片側だけにしても子どもにとってより“やさしい親”が存在することが抑うつの深化を防いでいる可能性も考えられよう。序論でも見てきたように，夫婦間の葛藤関係が子どもの問題行動や精神症状と関連することは既に多くの先行研究で明らかにされてきており（e.g., Emery & O'Leary, 1982），今後はこうした否定的側面とともに，相手を信頼し異性としての魅力を感じることができているかどうかといった，夫婦関係の肯定的側面についても評価して両面から考察していく必要があると考えられる。

2．家族機能および養育態度を媒介とした関連メカニズムについて

夫婦の愛情関係が家族機能（家庭の雰囲気と家族の凝集性）を媒介して子どもの抑うつ傾向と関連するという仮説に従ってパス解析を実施したところ，FIGURE 1，FIGURE 2 のようなほぼ仮説を支持する結果を得た。夫婦間で配偶者に対する愛情度が高いほど家庭の雰囲気はメンバーにとって居心地のよいものであったり，家族のまとまりも高い傾向が認められ，夫婦の愛情関係は家族機能と確かに関連することが示された。また，夫婦関係の良好さは親の子どもに対する養育態度との関連でも，両親ともに子どもに対する暖かさに関わっていることが示された。

そして，子どもの抑うつとの関連では，仮説通りこうした家庭の雰囲気の良さや凝集性の高さと関連することが示された。親の養育態度に関しては，母親側の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

みに有意な関連が認められ，母親の暖かい養育態度は子どもの抑うつ傾向の低さと関連することが示された。一方，父親側の養育態度は母親（妻）に対する父親自身の愛情とは関連しているものの（妻への愛情度の高さと，養育態度の暖かさおよび過干渉傾向の低さが関連する）子どもの抑うつ傾向との間では直接的な関連性は示されなかった。中学生期の子どもの抑うつ感と家族が認知する家族機能の程度との関連を検討した西出と夏野の研究(1997)でも，子どもの家族機能の認知や抑うつ感と関連があったのは母親の家族機能認知のみであり，父親のそれは本研究と同様に関連が認められなかった。父親の子どもとの接触時間の短さなどが父親の影響力を低めているのかもしれないが，今後さらに詳細な検討が必要である。また，本研究では親の養育態度として２つの因子（養育の暖かさ・過干渉傾向）について検討してきたが，甘やかしや放任などといったさらに多様な養育態度の諸側面についても研究されることが求められよう。

児童期にある多くの子どもたちにとって親はどちらも重要な愛着対象であり，自分が大好きなふたりの愛情関係が希薄だったり不安定である様子を見たり感じたりすることは，大きな心理的ストレスとなろう。この時期の子どもが抑うつ状態にあるとき，背後に親の夫婦関係の問題がありはしないか確かめることも必要である。また，児童期・思春期の子どもの抑うつも，成人と同様に，家庭内外のネガティブなライフイベンツが関連することが知られている（Hammen, 1992)。家族関係の良し悪しは，こうした問題に子どもが遭遇したときに，子どもを落ち込ませない，あるいは落ち込み深化の抑制に寄与できるかどうかにも影響する。著者らの先行研究（藤森，真栄城，八木下，菅原，1998）でも，子どもがネガティブなライフイベンツを体験しても，家庭の雰囲気が良く家族の凝集性が高ければ子どもの抑うつ傾向が低いレベルにとどまることを見出している。本研究の結果は，抑うつ状態にある子どもをサポートしうる家族関係にあるかどうかに夫婦間の愛情関係が影響を及ぼすことを示すものであり，こうした家族機能を経由した夫婦関係の影響について今後さらに検討されていく必要があると考えられる。

夫婦関係と家庭の雰囲気や家族の凝集性との関係性は，おそらく一朝一夕に作られるものではなく，子どもの誕生に先立つ夫婦ふたりの生活に始まり，妊娠・出産，そして子どもが就学期に達するまでの長い家族の歴史の中で醸造されていくものであると想像される。本研究は長期縦断研究であり，妊娠期からの資料を解析した先行研究では（菅原，1999），対象児童が乳幼児期にあったときの夫婦の育児協力の程度がその後の夫婦関係を予測するものであることが見出されている。子どもの精神的健康と夫婦関係，家族関係との関連メカニズムを明らかにしていくためには，こうした長期的視点からの検討も今後さらに必要であると考えられる。また，今回は質問紙法によって家族の各メンバーの認知を指標として検討されたが，実際にどのような個々人の行動や家族間のコミュニケーションがこうした認知を形成しているのかを観察等の手法によって確認していくことも求められよう。

本研究では家族関係と子どもの抑うつとの関連について検討してきたが，ここで見られたことは，学校などの家庭外の集団でも同様にいえるのかもしれない。例えば学校にも，“クラスの雰囲気”や“学校全体の凝集性”というものが存在する。それらは，子ども同士，あるいは子どもと教師との関係だけで形成されるものではなく，教職員間の関係性も影響する可能性は十分に考えられる。職員間に不信感や対立があれば，それらは学校全体の空気に広まっていくであろうし，反対に和気あいあいとした大人同士の関係は，落ち込んだ子どもの気持ちを支え得る暖かい雰囲気をクラスの中に流し込むこともできるのではないだろうか。家庭内の夫婦関係と同様に，家庭外での子どもを取り巻く大人同士の関係についても，その子どもの精神的健康への影響性について今後検討されるべきであろうと考えられる。

引用文献

American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (3rd ed.).* Washington, DC : Author.

American Psychiatric Association 1987 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (3rd ed., revised).* Washington, DC : Author.

American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed.).* Washington, DC : Author.

Bird, H., Canino, G., Rubio-Stipec, M., Gould, M., Ribera, J., Sesman, M., Woodbury, M., Huertas, S., Pagan, A., Sanchez-Lacay, A., & Moscoso, M. 1988 Estimates of the prevalence of childhood maladjustment in a community survey in Puerto Rico : The use of combined measures. *Archives of General Psychiatry*, **45**, 1120—1126.

Birleson, P. 1981 The validity of depressive dis-

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

order in childhood and the development of a self-rating scale : A research report. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **22**, 73—88.

Braiker, H.B., & Kelley, H.H. 1979 Conflict in development of close relationships. In R.L. Burgess & T.L. Huston (Eds.) *Social exchange in developing relationships.* New York : Academic Press.

Cicchetti, D., & Toth, S. 1998 Developmental psychopathology and disorders of affect. In D. Cicchetti & J. Cohen (Eds.), *Developmental Psychopathology (Vol.2).* New York : Wiley.

Cumsille, P.E., & Epstein, N. 1994 Family cohesion, family adaptability, social support, and adolescent depressive symptoms in outpatient clinic families. *Journal of Family Psychology*, **8**, 202—214.

Davies, P.T., & Cummings, E.M. 1998 Exploring children's emotional security as a mediator of the link between marital relations and child adjustment. *Child Development*, **69**, 124—139.

Dulcan, M.K., & Martini, D.R. 1999 *Child and Adolescent Psychiatry (2nd ed.).* Washington : American Psychiatric Press.

Emery, R.E., & O'Leary, K.D. 1982 Children's perception of marital discord and behavior problems of boys and girls. *Journal of abnormal Child Psychology*, **10**, 11—24.

Erel, O., & Burman, B. 1995 Interrelatedness of marital relations and parent-child relations : A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, **118**, 108—132.

Fincham, F.D. 1994 Understanding the association between marital conflict and child adjustment : Overview. *Journal of Family Psychology*, **8**, 123—127.

Fincham, F.D. 1998 Child development and marital relations. *Child Development*, **69**, 543—574.

Fleming, J.E., David, R., & Offord, D.R. 1990 Epidemiology of childhood depressive disorders : A critical review. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **29**, 571—580.

藤森秀子, 眞榮城和美, 八木下暁子, 菅原ますみ 1998 家族関係と子どもの発達(2) 家族関係と子どもの精神的健康について 日本心理学会第62回大会発表論文集, 8—10.

Garrison, C.Z., Schoenbach, V.J., & Kaplan, B.H. 1985 Depressive symptoms in early adolescence. In A. Dean (Ed.), *Depression in multidisciplinary perspective.* New York : Brunner-Mazel.

Ge, X., Lorenz, F.O., Conger, R.D., Elder, G.H., Jr., & Simons, R.L. 1994 Trajectories of stressful life events and depressive symptoms during adolescence. *Developmental Psychology*, **30**, 467—483.

Greenberger, E., & Chen, C. 1996 Perceived family relationships and depressed mood in early and late adolescence : A comparison of European and Asian Americans. *Developmental Psychology*, **32**, 707—716.

Grynch, J.H., & Fincham, F.D. 1990 Marital conflict and children's adjustment : A cognitive-contextual framework. *Psychological Bulletin*, **108**, 267—290.

Hammen, C. 1992 Cognitive, life stress, and interpersonal approaches to a developmental psychopathology model of depression. *Development and Psychopathology*, **4**, 189—206.

Harrington, R., Bredenkamp, D., Groothues, C. Rutter, M., Fudge, H., & Pickles, A. 1994 Adult outcomes of childhood and adolescent depression : III. Links with suicidal behaviours. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **35**, 1309—1319.

Hendrick, S., & Hendrick, C. 1992 *Liking, loving, and relating.* NewYork : International Thomson Publishing.

Kandel, D.B., & Davies, M. 1982 Epidemiology of depressive mood in adolescents. *Archives of General Psychiatry*, **39**, 1205—1212.

Kashani, J.H., Orvaschel, H., Rosenberg, T.K., & Reid, J.C. 1989 Psychopathology in a community sample of children and adolescents : A developmental perspective. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **28**, 701—706.

数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘 1996 子どもの発

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究, **7**, 31—40.

Kitamura, T., Sugawara, M., Sugawara, K., Toda, M.A., & Shima, S. 1996 A psychosocial study of depression in early pregnancy. *British Journal of Psychiatry*, **168**, 732—738.

国立社会保障・人口問題研究所 1998 第11回出生動向基本調査 厚生省統計局

Kovacs, M. 1997 Depressive disorders in childhood : An impressionistic landscape. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **38**, 287— 298.

黒川 潤 1980 円環モデルに基づく尺度(和訳版)の標準化の試み—家族満足度,親—青年期の子どものコミュニケーション, FACES IIIについて 家族心理学研究, **4**, 71—82.

Lee, J.A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 173—182.

Mahoney, A., Jouriles, E.N., & Scavone, J. 1997 Marital adjustment, marital discord over childrearing, and child behavior prolems : Moderating effects of child age. *Journal of Clinical Child Psychology*, **26**, 415—423.

村田豊久・小林隆児 1987 児童思春期の抑うつ状態に関する臨床的研究 厚生省 児童・思春期精神障害の成因及び法療に関する研究 昭和63年度研究報告書, 69—76.

村田豊久 1996 子どもの抑うつ自己記入尺度(日本語版) 私信による

西出隆紀・夏野良司 1997 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, **45**, 456—463.

Olson, D.H., Porter, J., & Levee, Y. 1985 *FACES* III. Minneapolis, MN : University of Minnesota.

Parker, G. 1979 Parental characteristics in relation to depressive disorders. *British Journal of Psychiatry*, **134**, 138—147.

Petersen, A. C., Sarigiani, P.A., & Kennedy, R.E. 1991 Adolescent depression : Why more girls ? *Journal of Youth and Adolescence*, **20**, 247—271.

Pffeffer, C.R., Klerman, G.L., Hurt, S.W., Lesser, M., Peskin, J.R., & Siefker, C.A. 1991 Suicidal children grow up : Demographic and clinical risk factors for adolescent suicidal attempts. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **30**, 609—616.

Rogers, B. 1996 Reported parental behavior and adult affective symptoms, 1. Associating and moderating factors. *Psychological Medicine*, **26**, 51—61.

六角洋子 1999 子どもの抑うつに関する研究動向 お茶の水女子大学人文科学紀要, **52**, 317—338.

Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265—273.

貞木隆志・樋野 潤・岡田弘司 1992 家族機能と精神的健康 Olson の FACES IIIを用いての実証的検討 心理臨床学研究, **10**, 74—79.

坂戸 薫・染矢俊幸 1999 PBI(Parental Bonding Instrument)とうつ病 精神科診断学, **10**, 399—407.

Sameroff, A.J. 1994 Developmental systems and family functioning. In R.D. Parke & S.G. Kellam (Eds.), *Exploring family relationships with other social contexts.* Hillsdale, NJ : Erlbaum.

Sheeber, L., Hops, H., Alpert, A., Davis, B., & Andrews, J. 1997 Family support and conflict : Prospective relations to adolescent depression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **25**, 333—344.

Stark, K.D., Humphrey, L.L., Crook, K., & Lewis, K. 1990 Perceived family environments of depressed and anxious children : Child's and maternal figure's perspectives. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **18**, 527—547.

菅原ますみ 1997 養育者の精神的健康と子どものパーソナリティの発達：母親の抑うつに関して 性格心理学研究, **5**, 38—55.

菅原ますみ・詫摩紀子 1997 夫婦間の親密性の評価：自記入式夫婦関係尺度について 精神科診断学, **8**, 155—166.

Sugawara, M., Mukai, T., Kitamura, T., Toda, M. A., Shima, S., Tomoda, A., Koizumi, T., Watanabe, K., & Ando, A. 1999 Psychiatric disorders among Japanese children. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **38**, 444—452.

菅原ますみ 1999 父親の育児行動と夫婦関係, そし

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

て子どもの精神的健康との関連 教育と情報, **483**, 7—12.

菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島 悟・佐藤達哉・向井隆代 1999 子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する 11 年間の縦断研究から 発達心理学研究, **10**, 32—45.

菅原ますみ・眞榮城和美・小泉智恵・酒井 厚 2001 家族関係と子どもの発達(1)—思春期における問題行動傾向：生後 16 年間の追跡調査から— 第 12 回日本発達心理学会大会発表論文集

詫摩紀子・八木下暁子・菅原健介・小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則 1999 夫・妻の抑うつに影響を及ぼす夫婦間の愛情関係について 性格心理学研究, **7**, 100—101.

辻井正次・本城秀次 1998 不適応現象の評価—児童期の抑うつ— 精神科診断学, **9**, 189—199.

Wagner, B.M., & Reiss, D. 1995 Family systems and developmental psychopathology : Courtship, marriage, or divorce ? In D. Cicchetti & D.J. Cohen (Eds.) *Developmental psychopathology (vol.1)* New York : Wiley. Pp.696—730.

Zahn-Waxler, C. 1995 Introduction to special section : Parental depression and distress : Implications for development in infancy, childhood, and adolescence. *Developmental Psychology*, **31**, 347—348.

付 記

本研究は，1997年度安田生命事業団の研究助成を受けました。長期にわたる縦断研究にご協力下さっている対象者のご家族に心より感謝申し上げます。また，ご指導を賜っております東京国際大学 詫摩武俊先生に厚く御礼申し上げます。

(2001.2.5 受稿, 9.22 受理)

Marital Relations and Depression in School-Age Children : Links with Family Functioning and Parental Attitudes Toward Child Rearing

Masumi Sugawara (Ochanomizu University), Akiko Yagishita (Ochanomizu University), Noriko Takuma (Tokyo Kokusai University), Tomoe Koizumi (Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science), Haya Sechiyama (Nagoya University), Kensuke Sugawara (University of the Sacred Heart) and Toshinori Kitamura (Kumamoto University) *Japanese Journal of Educational Psychology, 2002, 50, 129—140*

To investigate the relationship between marital relations and children's depression, as mediated by family functioning and parental attitudes toward child rearing, a questionnaire survey was carried out using a mailed questionnaire. Questionnaires completed by the father, mother, and children (average age of fathers, 43 years ; mothers, 39.8 years ; children, 10.2 years) were received from 313 families out of 1,360 families originally contacted. Mothers and fathers were asked to answer independently questions regarding their marital relations, family atmosphere, family cohesion, and attitudes toward childrearing. Children's depression was measured by a self-administered depression scale. The results supported the hypothesis that higher scores on the marital love scale were related to better family functioning and warmer parental attitudes toward child rearing, and that the marital love scale was negatively correlated with children's depression. The mother's warm attitude toward their children was correlated with lower depression in the children ; no significant correlation of depression with attitude was found for fathers.

Key Words : marital relations, family function, parental attitudes toward child rearing, depression in middle childhood, families

NII-Electronic Library Service